

平成30年11月26日(月)

### 11・25 三島由紀夫の憂国忌に寄せて

三島由紀夫の割腹自殺があったのは、昭和45年である。本校野球部が全国準優勝を遂げるのが昭和46年であるので、約その1年前、秋深い11月25日に事件は起こった。

私は小学5年生で、夕方暗くなるまでソフトボールに興じて自宅に帰った日、すれ違った先生方が物々しい顔をしていたのをうっすらと覚えている。

三島由紀夫ではなく、浅田次郎という作家がいる。青春時代の知的シンボルで憧れの存在だった三島由紀夫が三島事件を起こし、“世界中がまっしろになるような”大きな衝撃を受け、陸上自衛隊に入隊、第32普通科連隊に所属した。基礎訓練後に配属されたのは、東京出身だったこともあって奇しくも三島が自害した市ヶ谷駐屯地だった。

高校時代に小説家を志し原稿を出版社に持ち込んだ帰り道、ボディービルジムにいる三島を見かけたことがあるという。1973年春に自衛隊を任期満了で除隊。

元々、小説家になりたいと思っていたが、自衛隊生活も思いの外気に入っていたことや、第一師団司令部への転属の誘いもあり、辞めるべきかどうか深く悩んだそう。しかし、小説家になるという昔からの夢を叶えるために除隊、入隊中の2年間の遅れを取り戻すべく、小説を書く時間が取れる仕事をしながら習作や投稿を続けた。

婦人服販売会社を営む傍ら、雑誌ライターとして、インタビュー、書評、風俗ルポ、競馬予想など注文に応じて様々なテーマの記事を書いた。出世作は、「きんぴか」「プリズンホテル」「地下鉄に乗って」など。

最初の歴史小説が、「蒼穹の昴」中国の清時代。光緒12年(1886年(日本:明治19年))から光緒25年(1899年(日本:明治32年))までの清朝末期。貧家の子、李春雲(春児)は糞拾いによって生計を立てていたが、貧しい家族のために自ら浄身し、宦官となって西太后の下に出仕する。一方、春児の義兄で同郷の梁文秀(史了)は、光緒12年の科挙を首席(状元)で合格し、翰林院で九品官人法の官僚階級を上り始める。

清朝の内部では、政治の実権を握っている西太后を戴く后党と、西太后を引退させて皇帝(光緒帝)の親政を実現しようとする帝党とに分かれ、激しく対立していた。后党と帝党の対立は、祖先からの清朝の伝統を守ろうとする保守派と、衰えた清朝を制度改革によって立て直そうとする革新派(変法派)の対立でもあった。両者の対立は、やがて西太后と皇帝の関係にも、深い溝を生んでゆく。

春児は西太后の寵を得てその側近として仕え、一方、文秀は皇帝を支える変法派若手官僚の中心となる。敵味方に分かれてしまった2人は、滅びゆく清朝の中で懸命に生きていくという物語。

小説家の志は、いかんともしがたいぐらい大きなものであるということをまざまざと知った作品です。